

第2期中期目標期間
(平成22～27年度)
自己点検・評価報告書

平成28年3月
附属科学技術高等学校

目 次

- I 中期目標期間の実績概要
- II 特記事項
- III 次期中期目標期間に向けた課題等
- IV 中期計画の実施状況（主担当分）
- V 中期目標・中期計画ごとの自己点検・評価

I 中期目標期間の実績概要

1. 組織の特徴

(1) 全国のモデルとなる、科学技術高等学校

附属科学技術高等学校は、平成17年4月1日工学部附属工業高等学校から改組され、全国でも先駆けてできた科学技術高等学校である。それ故、科学技術高校とはどのようなものか、科学技術高校としてどのような教育内容、カリキュラムが必要なのか。全国の先頭に立って教育研究に取り組んでいる。

特に、第2期中期目標期間中には、文部科学省より、先進的な理数教育を実施するとともに、高大接続の在り方について、大学との共同研究や、国際性を育むための取組を推進するスーパーサイエンスハイスクール(SSH)として、平成22年度から26年度の5年間、平成27年度の1年間は経過措置校として、指定を受けた。また、同様に、文部科学省から、高等学校等において国際的に活躍できるグローバルリーダーの育成を図ることを目的とするスーパーグローバルハイスクール(SGH)の指定を、平成27年度から平成31年度まで受けている。これらの活動を通して、科学技術高校としてのカリキュラムを開発するとともに、科学技術高校の有用性を全国に発信している。

(2) 高校から大学、社会人につなげる科学技術教育の実験校

科学技術の進歩により、これからの時代に我が国で学ぶ子供たちは、国際化、グローバル化、産業構造の変化などで今までの環境と異なる環境で生活や仕事をしていくことになる。このような環境の変化に受け身で対応するのではなく、積極的に対応し、新たな社会を構築する者として、科学者、技術者、研究者を念頭に置いて、その基礎となる科学技術教育を行っている。そのためには、今までの知識、技能を伝授するだけでなく、思考力判断力表現力、協働して物事に取り組む態度等を育成する必要がある。このような観点から、新たなカリキュラムを構築し、前述したSSH等の研究開発指定校制度を活用して新たな教育に取り組んでいる。

また、東京工業大学の高大連携学部入試委員会と連携し、特別入試制度で10名程度の進学を行うことで、その成果を評価している。この10名については、大学と協力しながら、卒業後の進路も調査し、その教育が社会人になるのに役だったか調査を続けている。もちろん、他大学への進学者については、一部ではあるが、高校の方で追跡調査している。

2. 実績の概要

(1) 新科目の開発及び実践

国際的に活躍できる科学技術系人材の育成を目標に、平成22年度から26年度まで第3回目となるスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の指定を受け、新科目「科学技術コミュニケーション入門」を開発した。また、過去2回のSSH指定で開発した科目である「科学技術基礎」「科学技術」においては、改良改善を行うことで、知的好奇心を刺激する適切な実験実習を行った。こ

これらの成果は「課題研究」という、大学の卒業研究に相当する科目に反映させた。外部での各種コンテストにおいて課題研究を基にした発表で数々の入賞や表彰を受けている。

(2) 講演会等の積極的な開催

東工大教員の協力の下、1年次の教科「人と技術」(現「グローバル社会と技術」)において、専門5分野各1名の先生の講演会を行った。また、2年次の「先端科学技術入門」においては各専門分野に、およそ6名の大学教員(年間延べ26名程度)が、それぞれ設定したテーマ(単元)における授業計画を立て、本校教員との共同授業を行った。

そのほか、SSHにおける講演会としては、他機関の外国人研究者による「英語で聴く講演会」を毎年実施し、SGHでは、「グローバルリーダー育成」キックオフ講演会として、副学長による講演会を皮切りに、駐日アメリカ大使館の領事、本学池上彰教授の講演会を行った。

(資料1) 「グローバル社会と技術」講演会 講演内容

①	「燃料電池のしくみとエネルギーの流れ」 物質理工学院 応用化学系 伊東 章 (いとう あきら) 先生 <担当;森安>	使用教室;1号館2階212室 本校担当;森安(応用化学分野)
②	「プログラミングを楽しむ」 情報理工学院 情報工学系 権藤 克彦 (ごんどう かつひこ) 先生 <担当;近藤>	使用教室;3号館4階401室 本校担当;近藤(情報システム分野)
③	「ロボットはできた。さあ、どう動かそう。」 工学院 システム制御系 三平 満司 (さんぺい みつじ) 先生 <担当;岩城>	使用教室;2号館2階207室 (機械システム実験室) 本校担当;岩城(機械システム分野)
④	「風力発電を知っていますか」 工学院 電気電子系 七原 俊也 (ななはら としや) 先生 <担当;河野>	使用教室;3号館3階301室 本校担当;河野(電気電子分野)
⑤	「人々が生活する世界遺産」 環境・社会理工学院 融合理工学系 高田 潤一 (たかだ じゅんいち) 先生 <担当;増田>	使用教室;2号館3階302室 (造形室) 本校担当;増田(建築デザイン分野)

(3) 海外の学校との交流

平成 18 年度より続けているタイ王国カセサート大学附属高等学校との交流のほか、平成 22 年度よりフィリピン共和国のデ・ラ・サル大学インテグレートハイスクールとの 2 校の間で 1 週間の短期留学の交流を行った。本校からは 8 月の時期に派遣研修を行い、協定校は 10 月の文化祭の時期に来校し、交流を行った。

なお、平成 22 年度については、タイ王国の政情不安により、SSH での海外研修先は、シンガポール共和国とし、シンガポール国立大学数学科学高校 (NUS ハイスクール) との交流を実施した。これをきっかけに、2012, 2014 年に、NUS ハイスクールから Singapore International Mathematics Challenge (SIMC) に招待され、2014 年大会においては、日本からの参加校で唯一の受賞校となり、Commendation Award を受賞した。

このほか、SSH 指定校である立命館高校及び横浜サイエンスフロンティア高校への連携協力を行い、合同で、台湾、韓国、タイ、アメリカなどへの海外研修を行った。以上のような経緯も関連して、2015 年度には韓国の Korea Science Academy (KSA) 高校のサイエンスフェアに招待され、生徒が研究発表で金賞を受賞した。

(資料 2) フィリピンでの日本紹介



(資料 3) KSA サイエンスフェアでの受賞



(4) 高大連携教育、高大接続教育

第 2 学年次に通年で、大学の教員と高校の先生が連携して「先端科学技術入門」という科目を開講している。高大連携教育の一環として、第 1 学年次に大学の文化祭に参加する「キャンパス訪問」を、第 2 学年次に大学の教員の講義と研究室を見学する「サマーレクチャー」を実施した。また、第 3 学年に大学の教員が準備した様々な講義や課題にチャレンジする 2 泊 3 日の「サマーチャレンジ」に参加した。また、これに関係する高大連携特別入試では例年 10 名程度が指定校推薦として入学し、このシステムを平成 25 年度よりお茶の水女子大附属高校に、平成 27 年度より学芸大附属高等学校にも拡大、実施することに協力した。

また、高大接続教育として、前回の中期計画に引き続き、3 年次の 3 学期に、高校生のレベルを超えて、大学の学習につなげる「さきがけ教育」を実施するとともに、お茶の水女子大附属高校の生徒にも実施した。

II 特記事項

1. 優れた点

(1) スーパーサイエンスハイスクール(SSH)としての研究開発

文部科学省から、平成22年度から5年間の研究期間で、第3回目となるスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の指定を受けた。研究3年目に文部科学省により行われた中間評価では、「現段階では、当初の計画通り研究開発のねらいを十分に達成している。」という評価を得た。この評価結果は、評価のランクで表すと、最高位に位置する評価であった。また、平成27年度は経過措置校として1年間の指定を受けた。なお、詳細は特色ある点に記す。

(2) スーパーグローバルハイスクール(SGH)としての研究開発

文部科学省から、平成27年度から5年間の研究期間で、スーパーグローバルハイスクール(SGH)の指定を受けた。なお、詳細は特色ある点に記す。

(3) 高大連携教育、高大接続教育

大学との高大連携教育活動の一環として、特別選抜により附属科学技術高等学校から大学への入学者を受け入れた。

(資料4) 高大連携特別選抜による東工大への入学者数

	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
入学者数(名)	11	10	11	10	9	10

また、第1期中期計画より継続して、高校3年生希望者対象のサマーチャレンジ(8月)、2年生全員対象のサマーレクチャー(9月)、1年生全員対象のキャンパス訪問(10月:工大祭見学)を実施している。第3学年の3学期には、高大接続教育として、高校のレベルを超え、大学の教育に接続する「さきがけ教育」を実施している。

2. 特色ある点

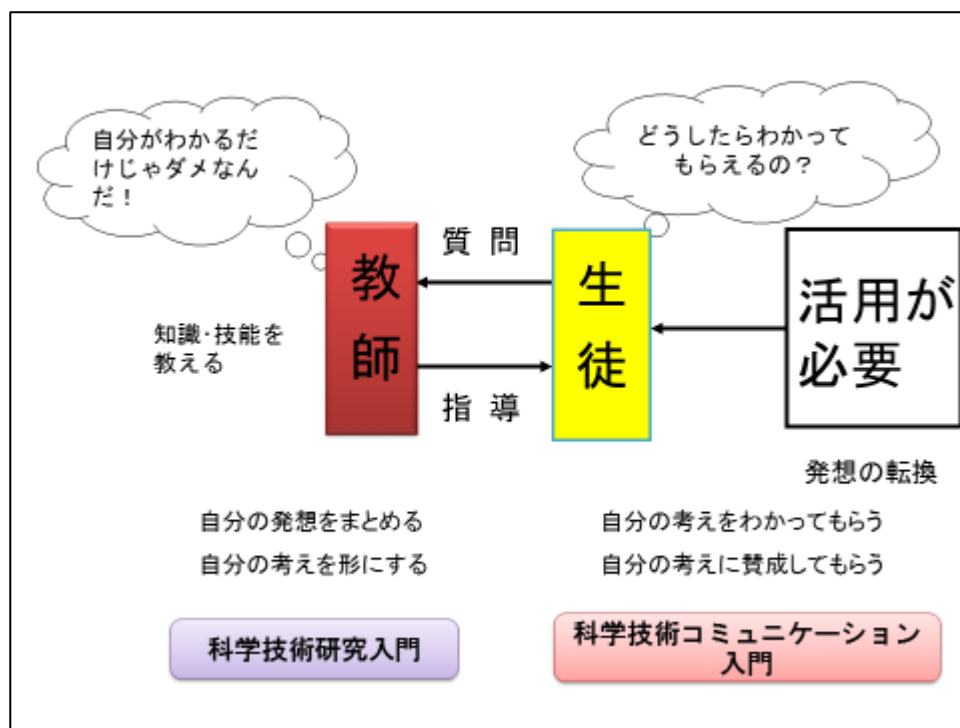
(1) スーパーサイエンスハイスクール(SSH)としての研究開発

本校は、文部科学省が設置したスーパーサイエンスハイスクール(SSH)研究開発学校に、初年度である平成14年度に指定され、科学技術教育を基盤とした新しい教育課程を開発した。平成17年度にSSHに再指定されるとともに、現在の校名に名称変更及び改組を行った。また、平成22年度から第3回目のSSHに指定されるなど、SSHで得られた研究成果は、発表会などを通して、その取り組みを全国に発信し、新しいカテゴリの「科学技術高校」創設にむけたモデルとなっている。第2期中期計画期間ではそれらをさらに進めるため、新たに平成22年度から26年度まで、また、平成27年度は経過措置校としてSSHの指定を受け、教育研究を実施した。また、平成24年度にはSSH研究開発中間報告会、平成26年度にはSSH研究開発成果発表会を実施した。

①新科目の開発

新科目「科学技術コミュニケーション入門」を開発した。この科目は従来のプレゼンテーションを超え、「相手を説得する」というところに視点を置いて、科学的なデータを活用しながら聴衆とコミュニケーションを行う科目である。

(資料5) 新科目「科学技術コミュニケーション入門」のねらい



また、高校生に最先端の科学技術についてわかりやすく説明すると共に興味関心を育む「先端科学技術入門」という授業を大学の支援の元、継続して実施している。

②国際交流の充実

国際交流にも継続的に取り組み、平成22年度には、タイ王国カセサート大学附属高等学校に加え、フィリピン共和国のデ・ラ・サール大学カンルーバンハイスクール（当時。現在は、デ・ラ・サール大学インテグレートドハイスクールに校名変更している）との間で協定を結び、国際交流の拡充を図った。

平成22年にタイ王国の政情不安により、代替措置として実施したシンガポール国立大学数学科学高校（NUSハイスクール）への海外研修をきっかけに、2012、2014年に、NUSハイスクールからSingapore International Mathematics Challenge (SIMC)に招待された。2014年大会においては、日本からの参加校で唯一の受賞校となり、Commendation Awardを受賞した。

このほか、国内のSSH連携高校として、立命館高校と横浜サイエンスフロンティア高校と連携をして、合同で、台湾や、韓国、タイ、アメリカなどに行き、交流を行った。そのような経緯もあり、2015年度には韓国で行われたKorea Science Academy of KAIST主催 Korea Science Academy Science Fair (KSASF) 2015に招待され、Chemistry部門で金賞を受賞した。また、タイ王国で行われたThailand-Japan Student Science Fair (TJ-SSF2015)では、全参加校の中から王女に対する研究発表の代表者として選出され、口頭発表により自らの研究成果を披露した。

③アーカイブズ化

アーカイブズ化では「課題研究」の成果や、本校の開発科目である「科学技術基礎」、「数理基礎」、及び副読本「数理応用（数学さきがけ）」について、著作権処理をして、PDF化した。PDF化に当たってはハイパーリンクを活用し、印刷した本にはない使いやすさを実現した。これらの成果はWebで公開している。

④成果普及

SSHに関してはこれまでの取り組みで、教材や教育方法、生徒の研究活動の成果等が蓄積され、これらの成果をまとめて、PDF化を行い、著作権関係を整理し、Webで公開するなどしてデジタルアーカイブズ化をはかり、普及に努めている。特に、「数理応用」という高校レベルを超えた教材は、注目を集めている。

(資料6)アーカイブズ化した教材を公開している成果普及のWebページ



(2) スーパーグローバルハイスクール(SGH)としての研究開発

平成 27 年度に文部科学省からスーパーグローバルハイスクール(SGH)の指定を受け、研究期間 5 年間として、「科学技術系素養を持つグローバルテクニカルリーダーの育成」に取り組んでいる。ここでは「グローバル社会と技術」「グローバル社会と技術・応用」「SGH 課題研究」といった新科目の開発に取り組んだ。新科目のうち、「グローバル社会と技術」、「グローバル社会と技術・応用」については、独自テキストの作成を行った。

海外研修では、フィリピン共和国とオーストラリアへ調査研修を行い、現地の高校生と、エネルギーや資源の問題について、コミュニケーションしてきた。

(3) 高大連携教育, 高大接続教育

大学と共同して、3 年間の高大連携教育、及び、高校レベルを超えた大学へつなげる教育、高大接続教育として、「さきがけ教育」を実施している。以下に概要を記す。

① サマーチャレンジ

第 3 学年対象のプログラム。約 35 名の希望生徒が 2 泊 3 日の日程で、約 20 名の大学教員の講演を聞いたり、生徒自身が様々な実験をしたり、考えを述べたり、科学的頭脳トレーニングをするプログラムである。このプログラムは特別選抜入試の一貫でもある。

② サマーレクチャー

第 2 学年全員対象のプログラム。大岡山キャンパスにおいて、午前中に講演を聞き、午後から希望の研究室を 2 箇所訪問する。研究室において大学教員の説明を聞き、研究室を見学する。世界最先端の研究を垣間見るという希有の経験を、生徒はレポートにまとめる。なお優秀なレポートを選び、校内で発表会を行う。

③ キャンパス訪問

第 1 学年全員対象のプログラム。大学祭期間中に公開されている研究室を 3 つ以上見学し、レポートを提出する。

④ さきがけ教育

第 3 学年の 3 学期に行う、推薦入学、A0 入学等で大学進学が決まった生徒に対し行う、高校レベルを超えた、大学につながる授業。本校で開発した数理重点化副読本「数理応用」等のテキストを使い、大学に入ってから、高大ギャップでつまづかないようにするための授業。数学以外にも理科、国語、英語、専門教科も開講している。

以上の教育の結果、主に A0/推薦入試で合格者を増やすと共に、よい影響を一般試験の結果に与えている。次に、A0/推薦と一般入試の合格者を表に示す(資料 7, 8)。

(資料7)主な国公立大学合格者

	H23.3 卒		H24.3 卒		H25.3 卒		H26.3 卒		H27.3 卒		H28.3 卒	
	AO/ 推薦	一 般	AO/ 推薦	一 般	AO/ 推薦	一 般	AO/ 推薦	一 般	AO/ 推薦	一 般	AO/ 推薦	一 般
東京工業大学	11	3	10	5	11	4	10	5	10	2	10	9
首都大学東京	2	2	3	0	0	5	3	1	2	1	2	6
横浜国立大学	2	0	1	3	4	0	3	4	2	2	2	2
電気通信大学	1	3	0	6	3	5	3	3	5	1	3	1
東京農工大学	0	4	0	2	5	3	4	2	2	3	4	2
東京海洋大学	0	5	4	0	2	2	3	0	3	1	2	1
筑波大学	2	2	4	3	1	4	3	2	0	0	1	0
横浜国立大学	1	1	1	0	1	0	0	2	1	0	2	2
京都大学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1

(資料8)主な私立大学合格者

	H23.3 卒		H24.3 卒		H25.3 卒		H26.3 卒		H27.3 卒		H28.3 卒	
	AO/ 推薦	一 般	AO/ 推薦	一 般	AO/ 推薦	一 般	AO/ 推薦	一 般	AO/ 推薦	一 般	AO/ 推薦	一 般
東京理科大学	2	41	7	21	5	42	4	29	4	25	4	26
芝浦工業大学	3	20	5	16	2	25	1	17	3	18	1	20
早稲田大学	1	4	8	3	8	6	6	8	9	5	8	10
明治大学	3	10	3	6	7	15	7	7	5	9	6	8
中央大学	1	10	6	6	4	6	4	8	2	8	5	6
日本大学	2	24	0	8	2	15	0	15	3	22	3	21
慶應大学	1	5	1	4	1	6	2	2	3	5	4	9

(4) 地域の学校や関係者との連携

地域等の関係者を委員に加えた学校評議員会や学校関係者評価委員会を開催し、地域の要望を伺う機会を設けている。その中から、学校周辺地域の活動では、毎学期ごとに学校周辺の歩道の清掃を行った。また、降雪の日には、学校周辺の歩道の雪かきを行い、地域から感謝された。また、災害対策として、地域の災害訓練に本校グラウンドを提供した。

学校周辺の芝浦小学校には、本校教諭が出前授業を行ったり、小学校のお祭り行事などに参加して、体験教室やSSHの成果をまとめたビデオを上映するなど、地域貢献も行った。また、本校陸上部が港区の小学生対象に陸上教室などを行った。

Ⅲ 次期中期目標期間に向けた課題等

(1) 先端的な科学技術を取り入れた教育プログラムの継続的開発と成果の普及

附属科学技術高等学校が日本で唯一の国立の科学技術高校であることから、常に先端的な科学技術を取り入れた教育プログラムを改善・開発する必要がある。そのためには、現在までのスーパーサイエンスハイスクール(SSH)で開発した新科目のさらなる開発とアーカイブズ化及びその成果の普及とともに、新SSHに向けた新たな教育過程、新科目の開発が必要である。

(2) 国際化に対応した、科学技術教育プログラムの開発と普及

将来、世界で活躍する科学者技術者になる生徒には、理数の学習はもちろんのこと、早い段階から国際化に対応しておく必要がある。そのため、平成27年度に文部科学省より指定されたスーパーグローバルハイスクール(SGH)の研究開発を進め、新科目の内容の精選、指導方法の確立を計ると共に、研究成果の普及を図る。

(3) 高大連携教育システムについての発展と検証及び、高校としての協力

高大連携教育システムの発展により、将来、東工大への特別選抜の枠がさらに一般の高校へも広がることが考えられる。そのときに、現在、本校で高大接続教育として行っている「さきがけ教育」をどのようにして他校に広げていくか。また、大学と協働しながら、さらによい高大連携システムの実験を行う。

IV 中期計画の実施状況（主担当分）

中期計画【38】「先端的な科学技術を取り入れた授業の開発等を行い、その成果の普及に努めるとともに、生徒の科学技術への興味を喚起し、主体的学習を促す教育システムを発展させる。」に係る状況

平成 22 年度に第 3 回目となるスーパーサイエンスハイスクール（SSH）研究開発学校の指定を受け、平成 26 年度までの 5 年間及び平成 27 年度は、経過措置校として 1 年間の SSH 指定を受けて次のような取組みを行った。平成 22 年度指定の SSH では、新科目「科学技術コミュニケーション入門」の開発、国際交流の充実化、研究開発で蓄積した教材等のアーカイブズ化、成果普及活動を行った。新科目「科学技術コミュニケーション入門」の開発では、科学技術に関する題材を選んだコミュニケーションというだけではなく、発表者側が科学技術の裏付けを持って説明すれば、聴衆の側にも科学技術的な考え方が浸透し、適切な判断を促すものであるという考えのもと、開発した科目である。指導内容は、専門分野の特徴を生かした内容・教材によって構成され、独自テキストも併せて作成した。

国際科学技術教育については、協定を結んでいる海外の 2 校との短期交換留学による海外研修を毎年 8 月に実施した。生徒の英語によるプレゼンテーションや自己設定課題の取組みのほか、引率教員による出前授業も行い、協定校生徒との協働学習を実践した。また、Singapore International Mathematics Challenge という世界規模の数学コンテストに、2012 年、2014 年と連続で 2 回招待され出場した。2014 年大会では、Commendation Award を受賞した。

アーカイブズ開発では、1986 年から開始した科目「課題研究」の要旨のデジタルアーカイブズ化を行い、本校ホームページ上の専用ページで公開し、他校の生徒などが活用できるようにした。成果普及活動については、平成 23 年度に SSH 中間報告会、平成 26 年度に SSH 成果発表会を行い、全国の SSH 指定校や工業高等学校等の教育者を対象として、発表会形式による普及活動を行った。

平成 27 年度の 1 年間は、経過措置校という位置づけで、SSH 指定を受け、平成 22～26 年度までの活動の充実化を主に行った。開発した新科目「科学技術コミュニケーション入門」においては、評価法について各分野の特徴を踏まえた評価の視点について提案した。国際科学技術教育については、協定校との国際交流を継続して実施するとともに、海外での研究発表会に招待され、韓国で行われた Korea Science Academy of KAIST 主催 Korea Science Academy Science Fair (KSASF) 2015 では、Chemistry 部門で金賞を受賞した。また、タイ王国で行われた Thailand-Japan Student Science Fair (TJ-SSF2015) では、全参加校の中から王女に対する研究発表の代表者として選出され、口頭発表により自らの研究成果を披露した。アーカイブズ化及び成果普及活動については、継続してこれまでと同様に取り組んだ。なお、SSH 指定により、平成 22 年度から 26 年度まで毎年 900 万円、平成 27 年度は 300 万円の資金を獲得している。

平成 27 年度から 5 年間の研究期間で、スーパーグローバルハイスクール（SGH）研究開発学校に指定された。本校のこれまでの科学技術教育システムに、3 つの新科目「グローバル社会と技術」（第 1 学年）、「グローバル社会と技術・応用」（第 2 学年）、「SGH 課題研究」（第 3 学年）を加え、これらを系統的に学習することにより、科学技術系素養を持つテクニカルリーダーの育成を目標としている。今年度

は、新科目の試行的な授業実践と、「グローバル社会と技術」、「グローバル社会と技術・応用」については、独自テキストの作成を行った。なお、SGH 指定により、平成 27 年度は 1,000 万円の資金を獲得した。

中期計画【40】「地域の学校や関係者等との連携を強化するとともに、教育活動と学校運営について、組織的・継続的な改善を行う。」に係る状況

地域への貢献として、芝浦小学校の出前授業やこども祭りに取り組んだ。出前授業では理科に興味を持ってもらうような内容を、こども祭りでは、科学技術に関連したおもちゃを配布し、科学技術や本校に興味を持ってもらうよう取り組んだ。また、地域の小学生対象のサッカーや陸上の教室を実施して地域に貢献した。

SSH での国際交流科学技術教育に加え、外国からの訪問者への対応、日本国内の英語での研究発表会への参加(立命館高校の Japan Super Science Fair)、外国での英語による研究発表会(シンガポール Singapore International Mathematics Challenge , Korea Science Fair , Thailand-Japan Student Science Fair) への参加を通して、国際性豊かな生徒の教育に取り組み、Singapore の大会では Commendation Award を受賞するなど成果を上げた。

学校の運営の改善として、定期的に学校評議員会、学校評価委員会を開催し、地域・関係者との連携を行いながら、改善に役立てた。また、学校評価アンケートを毎年、全生徒、保護者を対象に実施し、データを蓄積していくことで、学校運営の改善に役立てた。また、地震、省エネ対策にも積極的に取り組み、グラウンドの人工芝化、耐震補強等を実施し、学校の環境整備を進めた。

V 中期目標・中期計画ごとの自己点検・評価

1. その他の目標

(1) 附属学校に関する目標

中期目標 「I-3-3.附属科学技術高等学校と大学が連携を図りながら、研究開発学校制度等を活用し、科学技術系の専門高校として、教育課程や指導方法について先導的な研究を行う。」

中期計画「科学技術への知的好奇心を育成するために、授業に加えて実験・実習等を適切に配置した教育カリキュラムをさらに推進する。」

<実施内容と達成状況>

文部科学省より、平成 22 年度に第 3 回目となるスーパーサイエンスハイスクール(SSH)に指定され、その特例を生かして、新科目「科学技術コミュニケーション入門」を開発し、その新科目を中心に「科学技術基礎」「課題研究」など実験・実習を行う科目を適切に配置した教育カリキュラムを開発した。このカリキュラムを実施するとともに、生徒、教員へのアンケート調査、「課題研究」の研究内容等のコンテスト等への応募やその結果などから、ものづくりの過程を自らの発想でデザインし広く発信する科学技術コミュニケーション教育の効果が確認された。したがって、この新科目の有意性やその指導方法、カリキュラムの妥当性などの評価が得られた。文部科学省の平成 24 年のスーパーサイエンスハイスクールの中間評価の結果では、「現段階では、当初の計画通り、研究開発のねらいを十分に達成している」との評価を受けた。これらの活動から得られた、新科目の開発に伴うテキストなどの教材や、国際交流による海外の生徒とのコミュニケーションやそれに伴う生徒の変容、積極的なコンテストの参加などの成果は文科省への報告と共に、平成 24 年度の SSH 研究開発中間報告会、平成 26 年度の SSH 研究成果発表会において、全国に発信した。また、これらの報告会・発表会と共に、開発した教科のアーカイブズ化を行い、Web で、教材のダウンロードを可能にするなど、成果普及に努めた。

<自己評価判定>

「中期計画を十分に実施している。」(Ⅲ)

中期計画「高大特別選抜による入学者の動向を踏まえ、高大接続教育のための、発展的高等学校教育カリキュラムの開発を行う。」

<実施内容と達成状況>

高大連携教育である、第 1 学年のキャンパス訪問、第 2 学年のサマーレクチャー、第 3 学年のサマーチャレンジを継続、改良して行うとともに、当該取組をお茶の水女子大学附属高校及びと東京学芸大学附属高校に展開した。それに伴い、本校で行っている、3 年次の 3 学期「さきがけ教育」を他校生徒にも実施した。

<自己評価判定>

「中期計画を十分に実施している。」(Ⅲ)

中期計画「地域に開かれた運営体制を推進するとともに、国際化に対応した教育など初等中等教育政策において、優先的に進める必要があるテーマに関し、指導内容・指導方法等の調査研究を進める。」

<実施内容と達成状況>

地域に開かれた学校として、学校評議員会、学校関係者評価委員会を開催し、地域の声を聞く体制をとっている。その成果として、校外清掃や、小学校への出前授業、小学校でのお祭り、小学生相手の陸上教室など、多くの地域貢献を行った。

また、SSH、SGHなどの研究開発と重なるが、その制度を活用して、国際化に対応した教育について指導内容・指導方法の調査研究に取り組んだ。

<自己評価判定>

「中期計画を十分に実施している。」(Ⅲ)